

# 26L-am01

結腸直腸癌患者の FOLFOX6, FOLFIRI 療法におけるレジメン遵守のための薬剤部の関与 (3) — 1 年 (四季) を通しての解析 —

○川端 良徳<sup>1</sup>, 中川 明子<sup>2</sup>, 打越 秀<sup>2</sup>, 田宮 洋一<sup>3</sup> (1十日町病院薬, 2吉田病院薬, 3吉田病院外科)

【はじめに】進行・再発大腸癌の治療に、FOLFOX6, FOLFIRI 療法が効果的な治療として 1st、2ndline に選択されることが多い。これらの療法で、5FU の持続点滴を加圧式医薬品注入器(シュアーフューザー)を利用することにより、希望する患者は穿刺後から抜針までの間自宅で過ごすことができるようになった。しかし、どちらの療法も、5FU 持続点滴の時間設定は 46 時間であるが、終了時間に大幅な差が出ていた。この問題を解決するため、薬液の総容量と終了時間の関係を調べ、容量を調節し、トータルの治療時間を 48 時間に近づけることができた。

その後、年間を通して患者の治療に関わっていると、印象として、気温の上昇する時期には点滴時間が早まる傾向があった。今回、実際のデータの調査と解析を行い、また流体力学の観点から考察を試みた。

【方法】FOLFOX6, FOLFIRI 療法の、シュアーフューザーに充填した総容量と、持続点滴終了までの時間を季節により調べ、FOLFOX6 と FOLFIRI で各々説明変量が総容量、目的変量が時間となる単回帰分析で回帰直線を求め、比較検討した。

【結果・考察】1 年を通しての FOLFOX6、FOLFIRI 療法の薬液の総容量と終了時間の関係を調べるとやはり季節(気温)により薬液の流速に変化が見られた。また、流体力学によって説明できるものだった。今回の調査を元に、今後も化学療法が適正に施行されるよう努めたい。